水星交響楽団
第67回定期演奏会

2024.4.14 SUN

13:30 開演（12:30 開場）

ミューザ川崎シンフォニーホール

水星交響楽団

第67回定期演奏会

指揮　大井剛史

シルベストレ・レブエルタス　　**センセマヤ**（約7分）

シルベストレ・レブエルタス　　**組曲「マヤ族の夜」**（約35分）
（ホセ・アイヴス・リマントゥール 編曲）

I. Noche de lon Mayas - Molto sostenuto
II. Noche de Jararas - Scherzo
III. Noche de Yucatan - Andante espressivo
IV. Noche de encantamiento - Tema y variaciones

— 休憩（20分）—

イーゴリ・ストラヴィンスキー　　**バレエ音楽「春の祭典」**（約35分）

第１部「大地礼賛」
The Adoration of the Earth

第２部「生贄」
The Sacrifice

水星交響楽団

1984年に一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。年2回ペースで定期演奏会を開催。マーラーをはじめとした大編成の曲に取り組む一方、一般的には意外に演奏されない佳曲も積極的にとりあげており、特徴あるプログラミングは好評を得ている。2019年の第60回定期演奏会のマーラー交響曲第8番「千人の交響曲」でマーラーの交響曲演奏を完成させた（未完の第10番を除く）。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

アンケートのお願い

演奏会終了後に、本演奏会のご感想をお聞かせください。
プログラムと一緒に配布しているアンケート用紙にご記入いただき、演奏会終了後にロビーで係員にお渡しいただくか、こちらに掲載しているURL、もしくはQRコードからアンケートフォームにアクセスしてご記入ください。

PCなどから　suikyo.jp　　スマートフォンなどから

※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源をお切りください。アンケートは休憩中や演奏会後にご記入ください。

ごあいさつ

© Takashi Fujimoto

本日はお忙しいところ、私たち水星交響楽団の演奏会にご来場いただき、ありがとうございます。

今回の曲目、共通するテーマは「供犠」、つまり生贄を捧げる儀式です。
21世紀のIT社会に暮らす私たちにとっては、そんなものはむかしのことと思われるかもしれません。しかし、果たしてそうでしょうか。地震や噴火など天災が完全には予知できないように、なにか不確実なものに対する怖れは私たちのなかに変わらず存在するのではと思います。

昨年、上野の東京国立博物館で「古代メキシコ－マヤ、アステカ、テオティワカン」展が開催されました。私も観覧しましたが、紀元前10世紀から紀元16世紀にいたる約3000年間の荘厳かつ華麗でもどこか素朴な至宝が並ぶなか、もっとも印象に残ったのは、供犠が当時の科学と密接に関連していたということです。時がたつにつれ、「人身」だった生贄もいろいろなものに代用され、その名残は今では「お供え」程度になりましたが、なんらかの「利他精神」がないと安心できないという人間の意識を、客観的な裏付けをもって検証に検証を重ね少しづつ変えていく。科学の進歩は「供犠」とウラハラだったわけです。

ところで、今回の3曲はいずれも20世紀前半に書かれています。春の祭典→センセマヤ→マヤ族の夜という順序ですが、古代ロシアとメキシコの「供犠」を描いた作品が、ロシア革命から第1次大戦そして第2次大戦という戦時下の不穏な空気に満ちた時代につくられたことは偶然でしょうか。文明の進化が兵器や戦争戦略の進歩と大いに関係があることは種々の例をひくまでもないことですが、そんな時代を背景に「供犠」がクローズアップされた芸術がセンセーショナルな反響を呼んだ。私にはどうにも分かちがたいものがあると思えてなりません。皆さまはいかがでしょうか。

さて、今回は、指揮を大井剛史さんにお願いしました。大井さんには、彼が大学生のころから大変にお世話になりましたが、演奏会の指揮をお願いするのは実に約30年ぶりとなります。30年ぶりの再会がこのようなクセの強いプログラムで申し訳ありませんが、まあ、これが変わらない水響らしさということでお許しいただければと思います。

それでは、ごゆっくりお楽しみください。

水星交響楽団　運営委員長　植松隆治

大井剛史

指揮

© Ayane Shindo

2024年4月、東京佼成ウインドオーケストラ常任指揮者に就任。

17歳より指揮法を松尾葉子氏に師事。東京藝術大学指揮科を卒業後、同大学院指揮専攻修了。若杉弘、岩城宏之の各氏に指導を受ける。1996年安宅賞受賞。スイス、イタリア各地の夏期講習会においてレヴァイン、マズア、ジェルメッティ、カラプチェフスキーの各氏に指導を受ける。

2007～2009年チェコ・フィルハーモニー管弦楽団で研修。2008年アントニオ・ペドロッティ国際指揮者コンクールで第２位入賞。在学中より東京二期会、新国立劇場などのオペラ公演で副指揮者をつとめ、2002年「ペレアスとメリザンド」（ドビュッシー）を指揮してデビュー。その後はオペラのほかバレエ、ミュージカル、日本舞踊との共演など多くの舞台公演を指揮。

仙台フィルハーモニー管弦楽団副指揮者（2000～2001）。 ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉（現・千葉交響楽団）常任指揮者（2009～2016）、山形交響楽団指揮者（2009～2013）、同正指揮者（2013～2017）、東京佼成ウインドオーケストラ正指揮者（2014～2024）を歴任。このほか全国の主要オーケストラを指揮している。

レパートリーは極めて広く、オーソドックスな管弦楽／吹奏楽の作品を中心として、現代音楽の初演、ゲーム音楽、映画音楽、ポップスなどありとあらゆる音楽を手がける。トーク付きのコンサート、また子供のためのコンサートなどを通じて、より多くの方々に音楽に親しんでいただくことに情熱を注いでいる。

東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師（吹奏楽）。尚美ミュージックカレッジ専門学校客員教授。

指揮者 大井 剛史さん インタビュー
「アマチュアだからこそ、水響とは今回やれるところまでやりたい」

2024年4月に東京佼成ウインドオーケストラの常任指揮者に就任されるとともに、多くのオーケストラや吹奏楽団の指揮者として活躍されている大井剛史さんと水星交響楽団とのお付き合いは30年ほどとなります。当時を振り返りつつ、今回の定期演奏会への思いなどを語っていただきました。

大井さんに最初に当団の練習をお願いしたのは第18回定期演奏会（1994年10月1日）となります。その時のきっかけについてお聞かせください

東京藝術大学2年生の春でした。その演奏会の指揮者だった森口真司さんが指揮科の部屋に学生がいたところにやってきて、
「バルトークのオケコン振りたいやつおるか？」
とおっしゃったときに、真っ先に手を挙げたのが自分でした。それは、森口さんの下振り（本番の指揮者の代理として合奏練習の指揮をする）の声掛けでした。もし、その時手を挙げるのが5秒遅かったら、他の学生にチャンスが回って、その後の水響との関わりや今回の演奏会の指揮もなかったかもしれません。

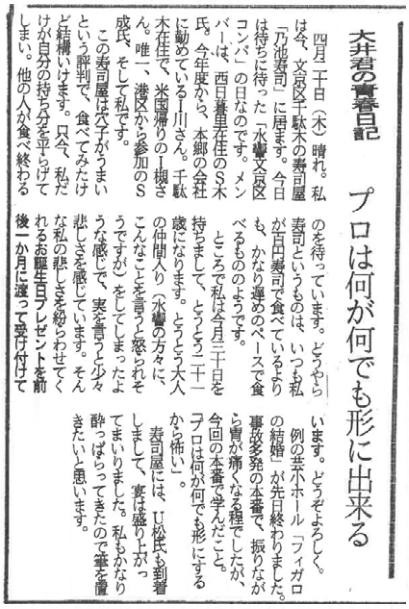
その初回の練習時に、私（植松）は国立駅で待ち合わせたのですが、大井さんが紺ブレザーにネクタイ姿で現れたのを覚えています

それは全然覚えていないのですが、当時学生だった私は、失礼がないようにと思って、そのような格好をしていたのだと思います。緊張していたわけではなかったのですが、まじめだったのでしょう。国立での合奏練習だけでなく、合宿にも参加しました。

当時の合宿の風景

その年のクリスマスイブには、当団と深い関係のある国立マーラー楽友協会の特別演奏会で、常任指揮者の齊藤栄一さんに代わって、マーラーの交響曲第3番と交響曲第9番（編者注：いずれも抜粋）の指揮もしていただきました

それだけでなく、次の年には、くにたち市民「第9」合唱団演奏会（管弦楽：水星交響楽団）で初めてベートーヴェンの第九を指揮させていただきました。また音楽だけでなくプライベートでも遊んでいただき、水響のメンバーの方々と浅草花やしきに行ったのも覚えています。このあたりが一番密に関わらせていただいたのだと思います。当時の自分は藝大という音楽家ばかりの特殊な環境にいて一般の人と交わる機会が無かったので、アマチュアオケとのかかわりがいわゆる普通の人たちと初めて接するチャンスでした。その中でも水響は、面白い曲が好きで、くだらないことも大真面目にやるような愉快な人達だなーと思っていました。常任指揮者の齊藤さんが帰国されてからは、R.シュトラウス楽劇「サロメ」（特別演奏会）やマーラー交響曲第6番（第20回定期）のチェレスタで演奏に参加したり、94年から並行して一橋大学管弦楽団で合奏トレーナー、入学式や記念式典の奏楽の指揮をしたりしていました。


大井君の青春日記　プロは何が何でも形に出来る

四月二十日（木）晴れ。私は今、文京区千駄木の寿司屋「乃池寿司」に居ます。今日は待ちに待った「水響文区コンバ」の日なのです。メンバーは、西日暮里在住のS木氏。今年度から、本郷の会社に勤めている一川さん。千駄木在住で、米国帰りの一樹さん。唯一、港区から参加のS成氏、そして私です。

この寿司屋は六子がうまいという評判で、食べてみたけど結構いけます。只今、私だけが自分の持ち分を平らげてしまい。他の人が食べ終わるのを待っています。どうやら寿司というものは、いつも私が五日寿司で食べているよりも、かなり遅めのペースで食べるもののようです。

ところで私は今月三十日を持ちまして、とうとう二十一歳になります。とうとう大人の仲間入り（水響の方々に、こんなことを言うと怒られそうですが）をしてしまったような感じで、実を言うと少々悲しさを感じています。そんな私の悲しさを紛らわせてくれるお誕生日プレゼントを前後一か月に渡って受け付けています。どうぞよろしく。

例の芸小ホール「フィガロの結婚」が先日終わりました。裏故多発の本番で、振りながら胃が痛くなる程でしたが、今回の本番で学んだこと。「プロは何が何でも形にする」から怖い。

寿司屋には、U松氏も到着しまして、宴は盛り上がってまいりました。私もかなり酔っぱらってきたので筆を置きたいと思います。

「水響興満新報」No.4 定演総力特集号（1995 年 4 月発行）より
（一部編者改訂）

大井さんが指揮者を志すきっかけをお聞かせください

小さいころからピアノを習っており、中学の吹奏楽部で打楽器を担当していました。当時は勉強が嫌いで、受験勉強を避けることを真剣に考えた末、音楽家を目指すことにしました。当時は作曲にも興味があったので、5分ぐらいの曲を作曲したりしていたのですが、ピアノ曲でも5時間ぐらい書くのにかかってしまっていたので、「これは割に合わないな」と考えてしまったのと、吹奏楽部で指揮もしていたことからの指揮者への憧れとが結びついて、じゃあ指揮者を目指そうと考えました。でも、地元の栃木には指揮者の先生を紹介してくれるような人が見つからなかったので、とりあえず打楽器で音大を目指そうと、高校時代から打楽器のレッスンに東京に通っていました。しかし、高校では部活動をやっていなかったため、ろくに練習もせずに行くことが多くなっていました。あるレッスンの時に、一回でも叩く姿を先生に見せたら練習不足であることが即バレると考えた私は、それを切り抜けるために、レッスンが始まる前に「先生、今日はご相談があります」と言い、実は自分は指揮者になりたいということを伝えました。先生はそれに対して「あなたはその方が向いている」と仰り、それが先生の最後のレッスンとなりました。高校二年のこの時が分岐点だったのかもしれません。その先生とは、後に東京佼成ウインドオーケストラで、指揮者と演奏者という立場で再会することになります。

アマチュアの団体の指導や指揮をされることは、どのようにお考えですか

学生時代から水響のようなアマオケの指導において、様々な作曲家の作品の勉強や指揮をした経験は、現在の基礎力になっているのは確かです。特に水響はバルトークやマーラーなどチャレンジングな曲をやることができたので楽しかったです。先ほど言ったように初めて第九を指揮したのは20歳の時でしたし。

常任指揮者の齊藤さん以外の方が指揮をされる演奏会は今回で4回目になります。その初回から大井さんのお名前は団内で挙がっていました。今回、水響からの指揮の依頼を受けた時にどのように感じられましたか、また何回か合奏をやられて、どう感じていますか

アマチュア団体から再度オファーを受けて久しぶりに行くと、以前はあんなに楽しかったのに、必ずしも同じように楽しく感じられない時もまれにありました。そういうこともあって、久しぶりのオケに行くのは躊躇することもあります。今回の水響からのオファーは、当時の思い出と約30年という期間もあって、最初は二の足を踏みました。でも、植松さんの励ましの下、「春の祭典」という曲につられて決心しました。これまで何回か合奏練習をやってきて、自分が昔のやり方と今とが、変わっていないのか変わっているのかは自分ではわからないというのが本心です。以前の振っていた感覚は自分では忘れていますし、やり方も常に変わっていくものなので。今は、指揮台から見ると、知らない人の中で知っている人が混じっているという感覚です。でも、当時の水響や一橋オケのメンバーもいるので、ちょっと気恥ずかしい感覚もありますが、昔の自分のことを全員が知っているよりは、やりやすいのだと思います。

今回の演奏会で取り上げるレブエルタスをはじめとするメキシコ音楽とのこれまでのかかわりは

1997年のゴールデンウィークに藤沢ジュニア・オーケストラ創立15周年とメキシコ日本人移民100周年を記念した演奏旅行（メキシコシティー、クエルナバカ）に同行した際に、メキシコ・ジュニア・オーケストラや黒沼ユリ子さん（当時メキシコを本拠地として活動されていたヴァイオリニスト）と共演したことが、メキシコ音楽が自分にとって大きく影響していることにつながっています。その時に現地のメンバーから記念にもらったCDに収録されていたのが「マヤ族の夜」でした。「センセマヤ」は、バーンスタインとニューヨーク・フィルがヤング・ピープルズ・コンサートで取り上げていたので、高校生の時から知っていました。今では、実はメキシコの古い吹奏楽団のレコードをこっそり買ってひそかに楽しんだりしています。メキシコに行った時の印象と憧れが自分の中にずっとありましたが、メキシコ音楽はなかなか演奏するチャンスがありませんでした。

大井さんにそれほどメキシコ音楽への傾倒があるのを知らずにオファーしていました。それも運命だったのかもしれませんね。「春の祭典」についてはいかがですか

バレエ公演での指揮の経験はあるのですが（NHKバレエの饗宴2013、東京フィルハーモニー交響楽団）、演奏会では初めてです。レブエルタスも「春の祭典」も一見プリミティブ（原始的）な印象ですが、レブエルタスはむき出しな感じがする一方で「春の祭典」は精巧に作られていて、ハーモニーも美しいし、キャラクターも豊富で色彩豊かで、単なる難しい曲ではありません。変拍子や大音量はごく一部の側面に過ぎなく、繊細でジューシーなところがたくさんあって、創造力を掻き立てられるスコアであり、やっていてすごく面白いと感じています。メキシコとロシアの作曲家の対比が興味深いです。

最後に、本日の演奏会の聞きどころを教えてください。

昔と比べてどうこうと言うのではなく、今しかない関係性の上で、シンプルに前に向かっていい演奏を作っていきたいと思っており、今回の演奏会では「アマチュアだからこそやれるところまでやる」ということを意識しています。レブエルタスも「春の祭典」も、暴れる水響を客席から温かく見守っていただけたらありがたいです。

（聞き手：植松 隆治）

チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報がスマホで確認できるようになりました！

演奏会の概要
演奏曲の試聴
チラシ画像
プロモーション動画
楽団からのメッセージ
楽団のWebサイト SNS

スマホのカメラを起動し、こちらのQRコードにカメラをかざしてください

Powered by Orchid

PROGRAM NOTEs

シルベストレ・レブエルタス

センセマヤ

～鬼才レブエルタス！～

Hola！水響の定期演奏会では久々のメキシコ人作曲家の登場です！前回は7年前のブラジル風バッハ第7番・ブラームス交響曲第1番のアンコールで、現在もバリバリ活躍されているメキシコの現代作曲家アルトゥール・マルケス先生のダンソンNo.2を取り上げました。今回プログラムの前半で、メキシコの鬼才レブエルタスの名作を取り上げます！

レブエルタスはメキシコ中部のデュランゴ州で12人兄弟（すごい！）の長男として1899年に生まれました。芸術的な家庭で育ち、8歳でバイオリンを弾き始めます。メキシコ国立音楽院に入学後、アメリカに留学して作曲とバイオリンを学びました。バイオリンも凄腕だったのですが、作曲家としては独自の筆致で、帰国後カルロス・チャベスとともに20世紀のメキシコ音楽のリーダーになりました。最高の長男ですねぇ。

バイオリンを抱えた格好いいレブエルタス

あぁチャベスも素晴らしいなぁ、交響曲第2番“インディオ交響曲”は大変有名ですね。ちなみにレブエルタスはメキシコ音楽の父といわれたチャベスとは異なり、いわば非主流派。スペイン独立戦争に志願兵として参戦する熱血派、過激な作風で完全独自路線の孤高の天才だったようです。

レブエルタスは1940年に逝去するまで10年ほどの短い創作期間でたくさん良い曲を書いたのですが、その中でも有名な曲が本日演奏するセンセマヤ（1937年）、そして最高傑作と言われるマヤ族の夜（1939年）です。近年は偉大なグスターボ・ドゥダメルとシモンボリバル響のライブ演奏、サロネンのレブエルタス特集など、演奏も増えてかなり普及した印象です。

～曲目紹介　センセマヤとは何か？ちょっと深掘り～

そもそもセンセマヤとは何か。もともとレブエルタスはキューバの詩人ギーエンの詩集に感化されて作曲しました。センセマヤとはパロモンテ教というアフロキューバの宗教に伝わる蛇殺しの儀式で、もともとは中央アフリカ由来の風習だそうです。蛇というのは日本でも世界的にも、様々な宗教で神聖な動物として祀られたり畏敬の対象だったりしますよね。一説では、センセマヤは脱皮と再生を繰り返す蛇の精霊の力を借りて、健康祈願とか悪霊をお祓いする儀式とも言われています。

センセマヤの詩はこんな感じ（右上）。Google先生と小生の和訳でも雰囲気が伝わると嬉しいです。

さてさて、いよいよ曲の中身！全曲にわたり7拍子、かつ同じテンポで進行するのが、センセマヤの最大の特徴です。これはギーエンの詩を読んだレブエルタスが、7拍子の7拍目アクセントがピッタリ！と息巻いて作曲したと考えられています。まるで詩吟のような作り方ですねぇ。当初は小編成の室内楽曲として作られ、その後現在のオーケストラ版に編曲されています。

マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
蛇の目はガラスでできている
蛇がやってきて、棒に巻きつく
ガラスでできた目で棒を丸くして
ガラスの目で

蛇は足なしで歩く
蛇は草むらに隠れる
草むらに隠れて歩く
足がなくても歩く

マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！

斧で叩くと死にます
今すぐ叩いて！
足で叩かないで、噛みついてくる
足で叩かないで、逃げちゃう

センセマヤ　蛇が
センセマヤ

センセマヤ　その目で、
センセマヤ
センセマヤ　舌で、
センセマヤ
センセマヤ　口で、
センセマヤ . . .

死んだ蛇は食べられない
死んだ蛇は囁くことができない
歩けない
走れない
死んだ蛇は見ることができない
死んだ蛇は飲みこむことができない
息ができない
噛めない！

マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
センセマヤ . . .　蛇
マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
センセマヤ　蛇は動いていない。
マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
センセマヤ . . .　蛇
マヨンベ、ボンベ、マヨンベ！
センセマヤ　蛇は死んだ！

冒頭ドラの低い音響から始まり、太鼓が7拍子のセンセマヤモチーフ。遠くからはおどろおどろしいバスクラリネット。蛇の出現とともに、センセマヤの儀式が始まります。闇夜に松明の火あかり、胴体は視認できずとも、蛇の目だけが緑色に輝く、そんなイメージですかねぇ。しばらくするとファゴットが儀式のリーダーであるマヨンベを招集、チューバが第一主題の人間のテーマを演奏します。金管楽器は蛇を倒す人間なのです！メタルギロも登場し儀式の機運が高まったところで、蛇が巻きついた弦楽器がマヨンベの名前を力強く叫びます！マヨンベ！ボンベ！マヨンベ！

曲は蛇との戦いのなかで急速に盛り上がって、そして静寂。太鼓の音だけが聞こえたのち、第2主題の哀愁のメロディ。そして、水響の見せ場！7/8拍子と7/16拍子の激しい掛け合いに突入！まさに蛇と人間のバトル！時折オマケの1/2拍をつけてでも、7拍子にこだわる鬼才レブエルタス！もう最高！最後のコーダはキラキラしたカッコいいテーマが突然入って大団円でテンションMAX！追い詰められ力尽きた蛇を、ティンパニソロとオーケストラ全奏強打で打ち倒し、儀式完了。曲が突然、衝撃的に終わるのです。

同じフレーズ、リズムを繰り返すことで生まれる高揚感、そして突然の中断と静寂、哀愁のメロディ。そんなレブエルタスの音楽を満喫していただければと思います。

～最後に～

レブエルタスがセンセマヤを書いたモチベーションは何か。それはルーツを巡る探究心、文化や風習への畏敬の念ではないかと思います。我々は音楽を通じて、レブエルタスの描いた縁起の良いアフロキューバ文化の魅力を少しでも感じていただけるように、一生懸命演奏します！ Vamos！

（レブエルタスがセンセマヤを書いた37歳　湘南の狼こと椿 康太郎）

［参考文献］
https://houstonsymphony.org/sensemaya-poem-and-piece/
https://ethnomusicologyreview.ucla.edu/journal/volume/19/piece/800

シルベストレ・レブエルタス
（ホセ・アイヴス・リマントゥール 編曲）

「マヤ族の夜」

誰もがご存じの本作品は、1939年に公開されたチャノ・ウルエタ監督のメキシコ映画「マヤ族の夜」（La Noche de los Mayas）のためにレブエルタスが書いた映画音楽を、指揮者のリマントゥールが組曲に編曲したものです。西ミシガン大学のアンザルドゥアという方の論文によりますと、本映画はハリウッドに押されたメキシコ映画界のなかでウルエタ監督が壮大なメキシコの伝統を作り出すために全力を尽くした作品群のひとつだそうです。メキシコ国立映画委員会（UTECM）から最優秀映画賞、最優秀女優賞、最優秀撮影賞、最優秀音楽賞を受賞したという名作だったんですねえ。ユカタン半島にある本物の古代遺跡で撮影されたことも重要なポイントだそうです。現代文明をほとんど意識せずに生きているマヤ族の村に、ミゲルという白人探検家がやってきます。村の狩猟者ウズや見習い呪術師の女性、長老、そして美少女ロルなどが登場いたします。なにやらお話はややこしくなり、やがて訪れる悲劇. . . 映画の筋はこのくらいにいたします。

第1曲「マヤ族の夜」 Noche de lon Mayas

映画の冒頭にドドーンと流れる重厚な音楽です。重低音のHの響きに大太鼓がドンドン、何かたいへんなことが起こりそうな長いメロディにトロンボーンの合いの手、ホルンの雄叫び！画面いっぱいの台形ピラミッドを背景に下から字幕が流れてまいります。スターウォーズへの伝統を感じる感動的な導入ですね。中間部はモルトカンタービレの物悲しいメロディ、村に入っていくミゲルがロルになにやらテト風の小動物をプレゼントしたりします。ときおり入り込む怪しい和音。物陰から狩猟者ウズがミゲルとロルを見ています。悲劇的な何かが起きてしまうのでしょうか。インディアンドラムが刻む場面では誰もが南米クラシック音楽の父カルロス・チャベスを思い出すことでしょう。やがて冒頭のテーマが回帰いたしますと大太鼓に支配されて完結いたします。映画の導入としても組曲の冒頭としても素晴らしい効果を上げております。

第2曲「どんちゃん騒ぎの夜」 Noche de Jararas

スコアにはTempo de sonと書かれております。sonというのはキューバ辺りではじまった陽気なリズムに歌がのる音楽です。ピクサー映画の「リメンバーミー」で主人公がギターで歌っている感じに近いですね。メキシコ第2の国歌と呼ばれるモンカーヨ作曲の「ウアパンゴ」が思い出されます。たいへんリズミカルで楽しい音楽ですが、レブエルタスは8分の5拍子と8分の6拍子が交錯するなかなかのスリリングなスコアを書きました。映画ではいくつかの場面に登場いたします。村人が外に集まって注目している中で、若者が走ってきてツボを割る競技的な場面が印象的です。夜の場面ではないですねえ。本曲もところどころにチューバが怪しい和声の合いの手をいれます。曲はたいへん盛り上がっていくのですが最後はヒューっと静まっていきましてチューバとバスーンが小さなピリオドを打ちます。

第3曲「ユカタンの夜」 Noche de Yucatan

「ユカタン」というのはメキシコにある州の名前で、ユカタン半島の一部だそうです。オルメカとマヤ文化の中心で、チチェン・イッツァの遺跡という台形ピラミッド、チュムル、エク・バラム、セイルなどの廃墟都市が数多くあるそうです。曲はゆったりとしたテンポの素朴なやさしいメロディが中心となっているなかで、時おりドンドンという大太鼓や不穏な和音がそっと見え隠れいたします。弦楽合奏の濃厚な歌や考え込むような3拍子など、映画の中では様々な場面に登場する断片を1曲に再構成したものです。例えばミゲルとロルの出会いの場面とか、ミゲルが木の下に寝ころぶ場面とか、どこかの山に登っているミゲルと下の方から顔を出したロルの目が合う場面とかですね。こうしてみるとミゲルとロルの曲集みたいですねえ。やがて中間部ではインディアンドラムとソナジャスの伴奏にのってフルートがソロで素朴感満載のメロディを奏でます。映画では村の広場で頭に羽飾りをつけた村人たちが円陣を組んで踊る場面で使われたりしています。ハーモニーつきの弦楽器の長いメロディが帰ってまいりまして、物悲し気なホルンの合いの手とともに曲が静まっていきますと. . .

チチェン・イッツァ

第4曲「魔術の夜」 Noche de encantamiento

いきなりのバルトークピチカート！クラリネットデュエットのタリラリタリラリ！オーボエの厳しいメロディ！なんという緊急事態的音楽でしょうか！「魔術の夜」のスタートでございます。緊張感はどんどん高まり、ついにダーッといった雄叫びに達します。映画でも美女か呪術師見習いの女性かが木を組み合わせた檻に入れられたり、若者が会いに来たり、松明を持った人たちが集まってきたり、犬が吠えたり雷が鳴ったりするかなりの緊急事態となっております。ここからは変奏曲となります。

第1変奏 ― ボンゴとディープコンガによる8分の8拍子デュエットでひたひたとはじまり、次いでトントンと同時にギロとソナジャスとトゥムクルが8分の5拍子で加わります。次いでカラコルと大太鼓とインディアンドラムが8分の3拍子で加わるのです！さらに響き線のない小太鼓とシロフォンとピアノが3連符系で加わります！これぞ本曲の真骨頂、この時点で10人の打楽器奏者とカラコル奏者とピアノ奏者が登場でございます。同じテンポの上に4種のリズムが同時進行するというポリリズム！ちなみにカラコルというのはほら貝のことです。本日は選ばれしホルン奏者が豊橋のほら貝専門店にて選びに選び抜いたほら貝を演奏いたします。映画の方では台形ピラミッドを前にして裸の男たちが集まる中、長老が何かを宣言して、打楽器やほら貝を吹く男たちも登場し、なにか

祈りを捧げながら杯を空に掲げておりました。12人のポリリズムを背景にコントラバスはオスティナート、ヴィオラはフォルティッシモのあやしいハーモニクス、ホルンが2度重ねの強烈なメロディを奏でてまいります。そしてついに11人目の打楽器奏者がフォルティッティッシモでドラを叩きますと、なんとここからは打楽器群のカデンツアでございます！スコア上ではフェルマータが書いてあるだけの1小節ですが、スコアの裏表紙には4つのグループがそれぞれの基本的なリズムの上で自由に即興するようお薦めされてあります。本日はどこまで解き放たれるのでしょうか！さてカデンツアを満喫いただきますと木管の緊急事態和音とともにホルンの緊急事態変奏が帰ってまいります。恐るべきことにまだ第1変奏の途中でございます。ヴァイオリン群が2度重ねでぐいぐいとグリッサンドいたしますと音楽は急激にディミヌエンドいたしまして沈黙へと至ります。

第2変奏 — 再びボンゴとディープコンガのデュエットで今度は8分の12拍子です。先ほどと同じ順序で打楽器群が入ってまいりまして、異なるパターンのポリリズムを展開いたします。カラコルのソロイスティックな雄叫び、映画では人々が何か叫んでおり、空にはハゲタカのような鳥がたくさん飛び交っていたかと思われます。金管群による土俗的ファンファーレ、チェロとヴィオラとホルンによる音の跳躍がすごいメロディ、悲鳴のような木管群、第１変奏と同様に急激に静まっていきまして沈黙に至ります。

打楽器練のひとコマ

第3変奏 — またしてもボンゴとディープコンガのデュエット！と思いきや今度はカラコルも一緒です！弦楽器の激しい刻み音階と管楽器群のフレーズが交互に現れます。映画ではたくさんの探検隊か村人たちが銃を持って森の中に入ったり、奇声を上げながら走ったり、美女とミゲルがキスをしたりしていますと、ついに場面は夜となります。松明を持ったたくさんの人、大木に縛られる美女、たくさんのトゥムクルが叩かれたりします。檻が壊されたりお姉さまが首を絞められたり、長老がなにかお話したり、松明を持った男たちが激したりします。

第4変奏 — 13人の打楽器奏者が一斉にフォルティッシモでポリリズムです！ここでついに13人目の打楽器奏者、響き線付き小太鼓が加わります！カラコルはどこに！弦楽器群の2度重ね音階メロディと金管群の跳躍メロディに木管群の非常事態トーンが呼応！ついには協和音によるグリッサンドファンファーレ的なメロディが登場いたしますとそのまま終曲になだれ込みます！白眉でございます！

終曲 — 13名の打楽器を従えて第1曲のテーマがドドーンと帰ってくるのでございます。すさまじい効果です！ドラもかなりの活躍です。映画ではついに男たちがどこかの家に火をかけるという衝撃のシーン！ああどうなってしまうのか！火の中でなにかを叫びながら倒れてしまう女性！場面は再び朝になりまして、男たちが馬を引きながら遺跡のような中に入っていきます。ピラミッドにも上っていきます。美女も一緒に歩いています。ずーっと歩いていきます。ああ！誰かが誰かを撃ってしまう！美女は茫然として一人で歩いて行ってしまいます。そして. . . もうストーリーはやめておきます。風が吹き、雨が降り始めますと第1曲冒頭のテーマが帰ってまいります。ああ、なんということだったのでしょうか！

映画はどちらかというと昼の場面が多いくらいでした。夜に満ちた組曲に再構成したのは編曲されたレマントゥールさんなのですね。また衝撃の打楽器カデンツアも映画からは聴き取れませんでした。もっと素朴に画面に登場する打楽器演奏がそのまま使用されています。それにしてもすごい音楽を書いたものです。同じテンポの上に展開されるポリリズムと執拗なくりかえしにはストラヴィンスキーとはまた別種のカタルシスがございます。本日の演奏にその片鱗でも感じていただけましたらそれに過ぎる喜びはございません。
マエストロ大井さんは本曲の音出し前に「なかなか規格外の曲」と世界に向けてつぶやかれておりました。なんという味わい深いお言葉でございましょう。

（山本 勲）

イーゴリ・ストラヴィンスキー

バレエ音楽「春の祭典」

「ナンセンス」な「ゲテモノ」

2023年9月10日放送の『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！～ランジャタイ国崎七変化～』（日本テレビ系）を見た衝撃は計り知れないものだった。

30年にも渡る長寿番組である『ガキ使』。その人気コーナー「七変化」は、若手のお笑い芸人が何らかの人物に扮してネタを披露する場である。そこでお笑いコンビ「ランジャタイ」の国崎和也が披露したネタは以下の通りだ。

a-haの『Take On Me』をBGMに、国崎を含めた4名の人物が登場する。そのうち2人は初老の女性であり、1人は単眼の怪物である。国崎は突然自身の眉毛を剃り出し、それをつまんで神社の社殿に奉納する。そんな国崎の背後では女性Aが「あんこ」を単眼の怪物の目玉に押し当て、女性Bはそれを布で拭いとるという行動を幾度となく繰り

返す。BGMのサビが終わると、不意に国崎がバリカンを両手に持つと、白目を剥きながら自身の頭髪を刈り取り、挙げ句の果てには、のしかかって神社を破壊してしまう。その間、女性2人はBGMに合わせてにこやかに踊り続ける。

「とんでもないものを見てしまった」というのが率直な感想だった。一般的にお笑いにはセオリーが存在し、大体の場合はそれに従った起承転結やオチが存在することで、面白さが生まれるものであるはずだ（少なくとも私はそのように理解していた）。

しかしながら、国崎の七変化にはただただカオスな光景が広がっているのみであり、何一つ理解ができなかった。ネタ終了後に何らかの説明があるかといえば一切ない。一体どこが笑うポイントだったのだろうか、というかこれはそもそもお笑いなのだろうか、と疑念は尽きることはなかった。

数週間後、気がつくと私は、ランジャタイの公式YouTubeをチャンネル登録し、国崎が出演する地上波の番組を録画予約してしまっていた。「ナンセンス」や「ゲテモノ」なんて言葉でもって記憶から消してしまいたかったのに、それができなかった。それどころか、セオリーをガン無視して我を貫き通す彼の姿勢に、魅力さえ感じてしまっていたのだ。

ふと、この異様な感覚は以前にも味わったことがあると思い出した。部活でフルートを始め、クラシック音楽を好きになりかけていた中学生の頃、あろうことかストラヴィンスキーの『春の祭典』に出会ってしまった、その瞬間の記憶である。

ミスリードな邦訳『春の祭典』

中学生の私は、父に買ってもらった茂木大輔著「くわしっく名曲ガイド」で『春の祭典』という曲があることを知った。春に聴くオススメとして、ヴィヴァルディの『春』やベートーヴェンのヴァイオリンソナタ『春』といった曲とともに紹介されていたのを覚えている。有名なヴィヴァルディの『春』は音楽の授業で聴いて知っていたので、同じように『春の祭典』も「日差しが降り注ぐ草原」「咲き誇る色とりどりの花々」「輪を作って踊る少年少女たち」といった光景が目に浮かぶ曲なのだろうと想像した。なんとも自然な流れである。

いざ、購入したCDを再生してみると、流れ出したのは謎の楽器のなんとも苦しそうなソロ。思い描いていた春とは程遠く、陰鬱な雰囲気に包まれている。旋律は様々な木管楽器へ受け継がれ、互いに相容れない様子で進んでいく。すると突然、弦楽器による強烈な不協和音の連打が始まった。不意をつかれた私は堪らず「ええ・・・」と声を漏らしたのだった。

CDに付属されていた楽曲解説を読むと、想像とは遥かにかけ離れた内容に思わずゾッとした。**太古ロシアの「異教時代の春の儀式」が描かれており、一人の乙女が生贄（いけにえ）として、長老たちによって太陽神イアリロに捧げられる。乙女は「生贄の踊り」を舞い、息絶える**のだそうだ。予想通り少女は踊っていたが、なんと死ぬまで踊らされていた。

後に知ったことだが、『春の祭典』の原題「*Le Sacre du printemps*」（仏語）は直訳すると「聖なる春」である。英題となると「*The Rite of Spring*」となり、こちらは「春の儀式」といった意味合いに近い。その英題を邦訳したものが『春の祭典』である。よって、**『祭典』という訳語には「神聖」や「儀式」といったエッセンスが込められている**のだが、当時中学生だった私にとって「祭典」という字面は「FNS歌謡祭」や「ヤマザキ春のパンまつり」くらいのライトなニュアンスでしか捉えることができなかった。シールを集めて応募すれば素敵なお皿が貰えてしまうくらいの、のどやかさを期待してしまっていた。結果として、半ば騙されたような形でこの作品に出会ってしまった訳である。

しかしながら、そこで「もう聴くのをやめるか」とはならなかった。強烈な不協和音や複雑な変拍子、グロテスクな主題が頭からこびりついて離れなくなってしまったのだ。気づくとCDを再生しては曲に合わせてヘドバンをする毎日。挙げ句の果てに、屈折した気持ちは「こんなにヤバい曲を知ってるのはクラスで僕だけ・・・」という不自然な高揚感へ昇華されてしまったのだった（いま思えばそれは「中二病」だったのは間違いない）。端正なクラシック音楽にときめき、その良さに気づき始めていたはずなのに、ひょんなことで遭遇してしまった「ナンセンス」な「ゲテモノ」の世界に、とことん堕ちていってしまったのである。

「高尚で優美なバレエ」からの決別

さて、私がそんなエピソードをわざわざ紹介してまで騒ぐ『春の祭典』とは、いかに異様な作品であるか。同じバレエ音楽であり、知名度も人気も非常に高い『くるみ割り人形』を例に、簡単に比較してみたい。

	くるみ割り人形	春の祭典
作曲者	ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840-1893）	イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882-1971）
初演	1892 年 12 月 18 日	1913 年 5 月 29 日
オーケストラの規模	一般的な「3 管編成」	大規模な「5 管編成」
ストーリー	クリスマス。少女クララはネズミの大群と対峙するくるみ割り人形を助ける。くるみ割り人形は王子様へ変身し、クララをお菓子の国へ招く。	太古ロシアの「異教時代の春の儀式」。一人の乙女が生贄として、太陽神イアリロに長老たちによって捧げられる。乙女は「生贄の踊り」を舞い、息絶える

まず、特筆すべきなのは『春の祭典』の演奏には**5管編成の巨大なオーケストラ**が必要である点である。「特殊管」と呼ばれる管楽器は、通常オーケストラでは1本しか使用されないが、この作品では複数本必要とされる。ピッコロ、コールアングレ、バスクラリネット、コントラファゴット、ワーグナーチューバが2本ずつ、さらにはアルトフルート、小クラリネット、バストランペットといった、オーケストラではかなりレアな特殊管も編成に加わる。その他にもホルンは通常の倍の8本であったり、ティンパニ奏者は2名必要であったりと、他の管弦楽作品よりもスケールが桁違いに大きいことがわかる。

そして、ストーリーを比較してみると、『春の祭典』がいかに野蛮でグロテスクなものであるかがより際立って感じられるのではないか。クリスマスが舞台のファンタジーと、かたや太古の野蛮な異教徒の儀式である。そもそも、中世の宮廷に端を発するバレエは、貴族や市民のための、優美で高尚な趣味であり、当

然『くるみ割り人形』もそうした趣向に沿った作品の一つであった。ところが、『春の祭典』はそのセンセーショナルな筋書きをもって、そうした期待をいっぺんに裏切ってしまったのだ。なんせクライマックスで生贄が死に絶えるような作品である。これはすなわち、それまでの「優美で高尚なバレエ」との決別を図ったとも言えなくもない。

さらに驚くべきことに、この「高尚で優美なバレエ」と「野蛮でグロテスクなバレエ」の初演の年代はものの20年しか変わらない。20世紀を迎えたばかりの西欧では、相変わらず市民の高尚な趣味たるバレエは盛んに上演されていた。こうした時勢において、当時の聴衆が『春の祭典』を素直に受け入れたかといえば、答えは当然「ノー」だった。

『春の"災"典』とその受容

1909年、ストラヴィンスキーは演出家セルゲイ・ディアギレフ（1872-1929）に出会う。ディアギレフは「バレエ・リュス」の創設者であり、それまでのバレエとは一風変わった演出でその名を知られるようになった、バレエ界の革新児である。音楽界、バレエ界の双方の天才がコンビを組み、『火の鳥（1910）』や『ペトルーシュカ（1911）』といったヒット作を世に送り出した。次なる作品を志向した末に作曲されたのが『春の祭典』である。

突飛な主題や複雑なリズム、さらには首を曲げ、内股で飛び上がるような奇天烈な振り付けなども相まって、リハーサルは120回にも及んだといわれる。そして1913年5月29日、サン=サーンスやドビュッシー、ラヴェルといったフランス音楽界の錚々たる面々が集う、パリ・シャンゼリゼ劇場で初演が行われた。

曲が始まると、すぐに嘲笑の声が上がり始めた。野次はひどくなり、ついには聴衆が賛成派と反対派に分かれ、お互いを罵り合い、殴り合う大騒動へと発展してしまった。劇場オーナーは客席に「とにかく最後まで聴いて下さい」と叫ばなければならないほどの惨状だったという。また、真相は定かではないものの、サン=サーンスは冒頭を聴くや否や「楽器の使い方を知らない者の音楽は聞きたくない」と言って席を立ったという逸話さえ存在している。当時の新聞はこの様子を「Le "massacre" du Printemps」（春の"災"典）という見出しで報じたほどであった。

しかし、「優美で高尚なバレエ」を求める聴衆に屈服したかと言えば必ずしもそうではなかった。散々たる初演を経験したはずの『春の祭典』はその後10年足らずのうちにロンドン、モスクワ、フィラデルフィア、ベルリンと、世界の名だたる都市で上演され、大喝采を浴びることとなる。「優美で高尚なバレエ」を古めかしい、時代遅れの趣味と捉え、「新しいバレエ」を欲したのもまた、聴衆であったのだ。

結果として『春の祭典』は音楽史に新たな1ページを切り開き、現代音楽の端緒となった。もはや、現在のクラシック音楽界でこの作品を「ナンセンス」や「ゲテモノ」なんて論評をする者は皆無であり、むしろ「現代音楽の古典」とさえ言われるまでに市民権を得ている。言い換えれば『春の祭典』が新しい時代を切り開いてくれたからこそ、現代音楽の多くが生まれていると言っても過言ではないのだ。

楽曲の構成

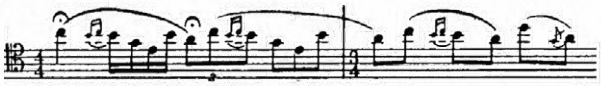
『春の祭典』は音楽史を揺り動かしたという文脈において「超大作」と言って差し支えないが、曲の長さは小規模の交響曲程度（約35分）しかない。しかしながら、その短い演奏時間の中には、ありとあらゆる情景がぎっしりと詰め込まれており、それらはものの数分のうちに入れ替わり、瞬く間に過ぎ去っていってしまう。よって、聴き逃しがないよう、ここで楽曲を細かく紹介しておきたい。
曲は二部構成となっており、それぞれ切れ目なく演奏される。

第1部「大地礼賛」

1.序奏（約3分半）

狂乱の前の静けさを表した音楽。超高音のファゴット（譜例1）によって民俗的な主題が提示された後、エスクラリネットやコールアングレ、アルトフルートといった特殊管を中心に互いに全くニュアンスの異なるメロディが奏でられる。

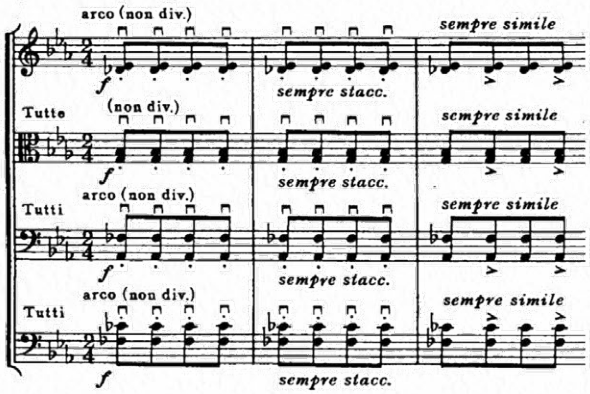
譜例1



2.春のきざし・乙女たちの踊り（約3分半）

突然、弦楽器による強烈な不協和音の乱打が始まる（譜例2）。村の乙女たちが春の訪れに狂喜乱舞する様子を表した、躍動感あふれる音楽。

譜例2



3.誘拐（約1分半）

大太鼓の打撃とともに音楽は更なる盛り上がりを見せる。踊りには変拍子が入り混じる。

4.春のロンド（約3分半）

フルートのトリルに導かれ、古代の春を思わせるような、ゆったりとしたメロディが奏でられる。ただ、後半ではそれが暴力的にも感じられるまでに発展する。

5.敵対する部族の遊戯（約1分半）

ティンパニやホルンを中心に繰り広げられる、活気に満ちた踊り。

6.長老の行列（約30秒）

４本のチューバに導かれ、長老が登場する。最高潮に達するとギロをはじめとした印象的な打楽器群がかき鳴らされる。

7.長老の大地への口づけ（約30秒）

音楽が突然静止すると、厳粛な雰囲気に包まれ、長老による大地への祈りが捧げられる。

8.大地の踊り（約1分）

地響きのような大太鼓に導かれ、全員が激しく踊る場面。半ば狂乱の状態で第1部が締めくくられる。

第2部「生贄」

1.序奏（約4分）

転じて夜の場面。木管楽器や弱音器を付けたトランペットが妖しい夜の雰囲気を醸し出す。

2.乙女たちの神秘的な集い（約3分）

6人のヴィオラによる神秘的な重奏に続いて、アルトフルートが印象的な主題を奏でる（譜例3）。ひそやかな雰囲気が漂う、全曲屈指の美しい場面。ついに信号音のようなラッパが鳴り響き、生贄が決まったことが告げられてしまう。

譜例3

3.選ばれし乙女への賛美（約1分半）

唐突に太鼓が11回鳴らされ（譜例4）、獣性を剝き出しにした音楽で生贄を賛美する。5拍子と7拍子を中心に構成されており、一息たりとも落ち着かない印象。

譜例4

4.祖先の喚起（約30秒）

音楽が突然静止すると、不気味な明るさを持つコラールが響き、祖先の霊が呼び覚まされる。

5.祖先の儀式的行為（約3分半）

大太鼓やタンバリンがリズムを刻み、謎めいた儀式が始まる。途中ホルンが咆哮するなど盛り上がりを見せるが、徐々に静まり、バスクラリネットだけが残る。

6.生贄（選ばれし乙女）の踊り（約4分半）

全曲のクライマックスであり、音楽史上稀に見る、複雑な変拍子で構成された音楽（譜例5）。選ばれた乙女はトランス状態で踊り続けるが、次第に歪み始める。ついに生贄はこと切れ、神へ捧げられる。

譜例5

「ゲテモノ」こそ愛す、我ら水響

中学生の頃に『春の祭典』に心を奪われた私は2013年に晴れて大学生となり、とある学生オーケストラに所属した。そして、そのOB団体として「水星交響楽団」というオーケストラが意欲的に活動していることを知ったが、たまたまその演奏遍歴を耳にし、驚愕した。なんと彼らは**私の悲願でもあった『春の祭典』を、過去に3度も演奏していた**のだ。アマチュアでは演奏困難とされていた作品のはずなのに、私が生まれた1994年には既に第1回目の公演を、そして私がこの作品を知った2008年にはなんと、名古屋と東京の二拠点公演まで果たしてしまっていた。

「部室によくいる、酒ばかりよく飲むおじさん達」くらいにしか思っていなかった水響の諸先輩方は、私が産まれる前から「ゲテモノ」を心から愛していたのだった。それどころか、水響は『春の祭典』に限らず、バルトークの『中国の不思議な役人』全曲や、矢代秋雄の交響曲といった、アマチュアオケプレイヤーやファンからは理解されることがそう多くない難解な作品にも果敢に取り組んでいた。後に私も学生オーケストラの運営に携わるようになり、身をもって知ったことではあるが、これは生半可な気持ちで達成し得ることではない。カネはかかるし、練習量も格段に多くなる。なにによりそういった作品は、演奏会でのウケがあまり良くない。

しかし、それをもってしてもなお、水響はそのイバラの道を意気揚々と闊歩し続けているのだ。その原動力こそ「我々がやらなくては一体誰がやるのだ？」と啖呵を切らんばかりの、**強烈なフロンティア・スピリット**にほかならない。私はそんな酔狂な水響に心を打たれ、「ここが自分の居場所に違いない」と確信し、今に至るわけである。お笑いでは「ランジャタイ」、クラシック音楽では『春の祭典』を愛するような「ゲテモノ好き」の私にとっては少しばかり、居心地が良すぎる場かもしれない。

今回、我々は「儀式・生贄」をコンセプトとした、あえて「ナンセンス」な舞台を確信的に仕掛けたつもりだ。端正で高尚な趣味としてのクラシック音楽を披露するつもりはさらさらない。むしろ、ご来場いただいた皆さまより「ただうるさいだけだった」「気持ち悪かった」「ドン引きした」「こんなのよりモーツァルトを聴きたい」なんて感想をいただけたのならば、しめたもの、である。

なぜなら、一見侮蔑的とも捉えかねない感想でさえも、やがては（かつて『春の祭典』がそういった道を歩んできたように）今回演奏される怪作達が日の目を見るような、そんな明るい未来の「もと」となってくれると信じているからである。

（大山 司）

［参考文献・サイト］
『くわしっく名曲ガイド』茂木 大輔（講談社）
『春の祭典』解説と名盤（ストラヴィンスキー）（MusicaClassica同好会）
https://tsvocalschool.com/classic/le-sacre-du-printemps/

水星交響楽団

常任指揮者

齊藤 栄一

コンサートマスター

森 勇人

1st Violin

荒金 香帆
石塚 章子
市川 明葉
加藤 峻一
小染 慶
清水 花凜
鈴木 牧
砂川 湧
高原 苑
滝澤 蘭
土屋 和隆
乗峯 俊一朗
乗峯 奈菜絵
前田 啓
米嶋 龍昌

2nd Violin

伊東 陽子
織井 奈津乃
片岡 拓巳
片山 なつみ
黒川 夏実
後藤 美歌
近藤 和
櫻田 泰斗
田村 奈津子
徳地 伸保
冨井 一夫
西沢 洋
★ 村部 一星
盛田 明雅
渡部 友賀

Viola

青木 知子
伊奈 裕貴
井上 拓
大澤 愛紬
太田 文二
長田 玲子
木村 納
髙橋 熙
★ 西田 実
松井 歩
宮崎 春菜
山本 祐希奈

Violoncello

稲葉 理乃
★ 金澤 直人
北岡 正英
鈴木 皇太郎
東郷 丞
中山 憲一
原田 大成
吉海 拓真

Contrabass

★ 石附 鈴之介
上野 未夢
大西 功
刈田 淳司
小島 辰仁
櫻井 望
壽川 賢太
田中 文彬
花田 信彦

Flute

大山 司
斎藤 美唯
★ 中澤 高師
本田 洋二
村上 芳明

Oboe

菅野 勇斗
黒川 達郎
寺田 晴香
寺田 吉太郎
★ 野口 秀樹

Clarinet

市村 広奈
越智 健介
刈田 瑞季
清水 樹土
★ 前中 悠輔
横地 篤志

Fagott

★ 伊藤 綾香
金谷 蔵人
川井 千菜都
久村 友理奈
福島 知浩

Horn

伊集院 正宗
大高 直哉
大山 美佳
岡本 真哉
★ 島 啓
清水 颯太
田村 和俊
満石 卓斗
山崎 智哉

Trumpet

淺田 健二
家田 恭介
★ 岩瀬 世彦
金子 恭江
倉林 佳祐
神山 優美

Trombone

小林 威之
櫻井 統
佐々木 英王
★ 佐藤 幸宏

Tuba

植松 隆治
東海林 拓人

Caracol

大山 美佳

Percussion

安西 理玖
上田 祥太朗
奥山 千穂
岸 敦子
高良 佑佳
鈴木 日向子
芹澤 美津穂
高橋 淳
高橋 奏良
★ 椿 康太郎
二瓶 晶子
福田 茉佑
山本 勲

Harp

東森 真紀子

Piano

山形 リサ

★＝パートリーダー

本演奏会でご指導いただいたトレーナーの先生方（敬称略）

鈴木 睦、髙山 健児 、林 憲秀、古野 淳、三橋 敦、柳澤 崇史、山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長：植松 隆治
選曲委員長：大山 司
コンサートマスター：森 勇人
弦楽器インスペクター：刈田 淳司
木管楽器インスペクター：中澤 高師
金管楽器インスペクター：植松 隆治
打楽器インスペクター：山本 勲

楽譜：伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕
ステージ・マネージャー：櫻井 統
会計：淺田 健二、黒川 夏実、砂川 湧
運搬：刈田 淳司
広報・受付：市村 広奈、岡本 真哉、鈴木 牧、土屋 和隆、東海林 拓人

プログラム企画：伊集院 正宗、伊東 陽子
チケット：清水 樹土、前中 悠輔
レセプション：菅野 勇斗、清水 颯太、清水 樹土
チラシデザイン：水本 紗恵子
プログラム制作：筒井 紀貴

次回演奏会のご案内

第68回定期演奏会

2024年10月27日（日）13:15開演（予定）

ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮　齊藤栄一

ジョン・ウィリアムズ　映画「スター・ウォーズ」より抜粋　エドワード・エルガー　交響曲第１番

水星交響楽団ホームページ　https://suikyo.jp　お問い合わせ　info@suikyo.jp